気象学者のための英語（2）*

木　原　研　三**

今回は代名詞以下品詞別に気づいた点を取り上げ，最後に構文について一言するつもりである．代名詞でよく見受けられる誤りは **each other の用い方**である．「彼等は互に愛しあっている」が They love each other. であるから each other は「互に」という副詞句であると思いこむ人がある．その結果「彼等は互に敵である」のつもりで *They are enemies each other. と書く．なぜこれが悪いかというと，They love each other. の中には Each loves the other. という関係が含まれているのであるから，他動詞の場合しか使えないのである．他動詞でなければ前置詞が来なくてはいけない（前置詞は他動性を有する点で他動詞と同じ機能を持つ）．上の文は従って They are enemies *to* each other. が正しい．

each, every に続く名詞は必ず単数．all と混同して *each points のように書くのは初歩的な誤り．each, every は一つ一つを取り上げながら数え，「どれをみても」という気持であるから単数名詞を用いるのである．同じような語に any があるが，これは Any boy knows that. のような場合はあとに単数名詞が来るが，別の用法では複数名詞が来ることもある．**any で始まる文には not が来ない**ので「どんな人もそれを知らない」のつもりで *Any man does not know that とするのは不可。No man knows that. とすべきである．

both は「二つ」だからといって **both と (the) two とは常に interchangeable とは限らない**．Both boys knew that. と The two boys knew that. はほぼ同義であるが，between the two places の代りに *between both places とするのはおかしい．both は両者の同一性を強調し，ひっくるめて見る語である．ところが between は両者の対立を前提としている語であるから，どうしても both とは結びつかないのである．

形容詞については名詞との結びつきが問題となる．日本語から考えると *cheap price, *much amount, *to a much degree と書いてもよさそうであるが，英語の論理としては品物そのものが cheap か dear なのであって，price は high か low かである．amount も large か small である．こういう結びつきを調べるには勝俣銓吉郎編「英和活用大辞典」が世界でもユニークな本であつて，英文を書く者のまず第一に見るべき参考書である．

日本語からの干渉のために誤りを起こしやすい形容詞があるが，ここでは1例だけを挙げる．*It is able to do that./ *I am passible to do that. といういう文は，どちらも形容詞の使い方がおかしい．able はその人の能力を，possible は物事の可能性を表わすのだから．日本語の「できる」という語はそのどちらをも指し得る言い方であるが，英語では区別される．上の able と possible を入れ代えれば正しい文となる．

形容詞の最上級に the がつくというのはごく初歩的な規則で，よく守られている．(e.g. Mt. Fuji is *the* highest mountain in Japan). しかし，**同一物の場所的時間的変化を表現する場合には theをつけない**ことも覚えていてよい規則である．たとえば「利根川はこの地点が最も深い」The Tone River is deepest at this point.

動詞ではまず，**自動詞と他動詞の混同**がある．* It is consisted of five parts. は It consists of が正しい．compose を使うと It is composed of five parts. となるのでこれと混同するのであろう．resemble は他動詞で *resemble to it の to は不要．discuss も他動詞で，後に about はいらない．

上の consisit を *It is consisting of five parts. とし，また* This vessel is containing water. と進行形に書く人があるが，「成っている，はいっている」という日本語にひかれて進行形にしたのであろう．consist や contain はその単語自身に継続的な意味があるので，さらに進行形にする必要は無いのである．

「考える，考察する」などの訳語として consider がよく用いられるが，次のような使い方は少しおかしいようである．*Long (1954) also carried out similar ex-

---

* English for the Meteorologist (2)

** K. Kinhara お茶の水女子大学（英語学講座担当）

—1968年5月6日受理—

periments and considered the steady state theory. 元来 consider は think about; take into account の意で，「心の中で考える」ことである．たとえば Please considier my suggestion.「私の提案をご考慮ください」We must consider the feelings of other people.「1人の気持も考えなくてはいけない」のように使う．初めにあげた文では Long がただ心の中で考えたというのではなかろう．ここはもっと明確な語を使うべきで，「論じた」ならば，discussed,「検討した」なら examined のような語を使うべきである．

*The earthquake occurred the next day was…のような言い方は関係代名詞（主格だから省いてはいけない）を落としたというよりも，過去分詞の形容詞的用法，たとえば The damage caused by the earthquake was…のような用法との混同によるのかもしれない．しかし occur は自動詞であるから分詞を使うなら現在分詞 occurring のほうを使わなくてはならない．なおこの変化形のつづりであるが，r を一つしか書かない人が多い．名詞 occurrence の場合も同様である．stop→stopped, stopping となるように t も二つ重ねるのが正しい．stir→stirring, recur→recurring も同様．

副詞では，**almost の使い方**がよくわかっていない人がある．*They almost belong to this type. のように書くのである．almost の普通の用法は He slipped and almost fell. のような場合で，「もう少しで倒れるところだった」の意．従って上例では belong する仕方を形容することになる．日本語に直訳すると「彼等はほとんどこの型に属している」で，どこが悪い文かわからないが，正しい英語は Most of them belong to this type. である．

「15年前から」も since ten years ago と訳す人が多いが，これは意味が通じないことはないが，まずい英語，つまり英米人なら書かない英語である．「3年前からこの型の器械を使っている」は We have been using this type of instrument for the past three years. とするのがよい．

前置詞については上記「活用大辞典」を参照すればたいてい解決がつく．参照に便利なのは「研究社大和英辞典」の巻末のリストである．

接続詞 and を文頭に用いるのは文体上おもしろくない．もちろん文頭に用いてすぐれた文体的効果を出すこともできるが，われわれがまねするのは危険．Dynamic climatology was started in this country by H.Arakawa (1932). And then Koenuma (1939) followed him with the study of the rainy season in Japan. で，第2の文の and then はあっても誤りではないが，まったく必要の無いことばである．省いたほうが文の調子が引きしまり，ずっと良くなる．大体において文頭に and は使わないことに決めたほうがよいようである．but も文頭に持って来るのをきらう文法家もあるが，これは必要ならば用いてさしつかえない．

but と同じ意味に使う however は等位節をつなぐことはできない．つまり *It was raining, however he went out. とするのは誤りで，ここは but でなくてはいけない．however を使いたければ，It was raining. However, he went out. [または He, however, went out.] とする．

内容節を導く that (e.g. the statement that he is…) は日本語の「～という」に置き換えられるが，反対に「～という」をすべて that で表現するわけにはいかない．つまり「～という状況」を the situation that…,「という傾向」を the tendency that…とはできないのである．situation, tendency という語は that-clause と結びつかないのである．どういう語が結びつき，どういう語が結びつかないかは理くつでは説明できず，慣用と言うほかない．そこで実際問題としては the situation in which…とするか他の単語を使うのがよく，tendency の場合は the tendency for the temperature to rise のように不定詞構文を使うのが普通である．

なお小さいことだが *A,B,C and etc. と書く人がある．etc. はラテン語の et cetera (=and others) であるから，その前に and を入れるのはおかしい．et al. のピリオッドを落としてはいけない．これもラテン語で，et alii の略だからである．ラテン語のついでに言えば *50 percents とするのは誤り．percent はラテン語の per centum (=per hundred) で「百につき」という副詞句なのであるから複数になることは無い．

最後に構文について．A close connection between the upper-air circulation in the neighbourhood of the Tibetan plateau and that over East Asia is found. という文がある．意味はわかるのだけれども英文としてはどうもまずい．要するに頭でっかちだからである．A から Asia までが主語として連綿と続き，最後にちょこんと is found があってはすわりが悪い．英文の自然の構造は最後にいろんな意味で重い要素が来るのである．上の文では is found を connection のあとに持って来る

ことでリズムが安定する．同様に The development of the westerly wave to form a Baiu flow pattern in East Asia and a monsoon flow in India is investigated. という文も is investigated の位置が悪い．この場合は is investigated をそのまま文頭には出せないので，能動態にして We investigate とするか It is our task to investigated とでもする．しかし多くは文頭に副詞があるもので，あれば Next [あるいは In the following pages] is investigated…とすればよい．

また**一般的に言って文はなるべく短く，20～30語までまとめることが作る上にも読む立場からも好ましい．**もちろん，良く組立てられておれば，100語を越えてもそのまま抵抗なく読者の頭の中に入って行くものであるが，そういう文章を書くことは大へんむずかしい．

以上，思いつくままに色々こまかいことを述べて来たが，実は一番たいせつな事は，**英語の文章の背後にある論理的な思考を体得すること**である．一つ例をあげてみよう．「世人は大器晩成と言うが，私ももう40を越した」という文章を英語にして People say that great talents are slow in maturing, but I am over forty now. としたとする．文法上は完全であるが，これは英語としては何か一本たりないのである．なぜかというと，but という語は It is spring now, but it is still cold. のように，普通ならば両立しないような statement をつなぐ役目をするのである．ところで上文では「大器晩成」と「40を越したこと」とは直接関係が無い．両者を論理的に結びつけるには中間に何かもっと statement があるべきで，そこを日本語では「が」があいまいにぼやかしているのである．英文としてつじつまを合わせるためには People say that great talents are slow in maturing, but I must not be idling away my time now that I am over forty. とでもしなくてはなるまい．特に論文体の英語では何よりも論理が明確にたどれることが必要である．ここまで来れば，もはやことば以上の問題になって来る．

Prof. John Alan Chalmers 逝く

著書の "Atmospheric Electricity"（第1版1949年，第2版1957年，第3版出版準備中）でまた1965年に東京と札幌で催された雲物理国際会議に来日して，日本の気象学者とも親しかった J. A. Chalmers 教授は，1967年3月14日にダーラムの病院で数週間の病気の後になくなった．

彼は1904年にロンドンで生まれた．1928年ケムブリッジ大学を卒え，ダーラム大学の物理学の講師になった．そこで学位も得，後には教授に進み，そこの理学部長も勤め，研究生活の一生を送った．

彼の最初の研究題目は放射能で，学位論文もそれに関するものであったが，後に関心は大気電気に移り，1938年にパスキルとの共著で発表した個々の雨滴の帯電に関する研究に引き続き，この方面の論文を続々と発表した．なかんずく落下する球によるイオンの選択捕獲，降氷の帯電，先端放電電流，地面付近の極作用等に関して重要な貢献をした．

彼は親しく会って知っている人もある通り，温厚な対話型の人物で，最後まで独身を通した．そして若い時からボーイスカウトの運動に熱心で，その役員もし，地域団体の長となり，表彰も受けている．（畠山久尚）